

令和5年度 第3回近江八幡市子ども・子育て会議 要録

日 時 令和6年3月26日（火）14時00分～16時00分
会 場 岡山コミュニティセンター 多目的ホール
出席委員 中川千恵美委員（会長）、久木康行委員（副会長）、山本一成委員、榎本祐子委員、浅井雅委員、大橋由喜委員、上田恵美委員、川嶋弘美委員、津田幸子委員、八木明恵委員、秋村加代子委員、伊崎葉子委員、北川美由紀委員、村井孝一郎委員、石塚千恵委員、大更秀尚委員、深尾甚一郎委員

傍聴者 0名

議 題 (1) 報告事項
①振り返り第二期計画の振り返り
②第三期計画策定に係るアンケート調査について
(2) 協議事項について
①第三期計画策定スケジュールについて
②第三期計画の基本理念について
(3) その他

議事詳細

1. 開会

会 長：こども家庭庁が出来たことで、各自治体で新しい動きが見られた1年であった。その中で、民間の子育て団体と連携した動きが見られている。本会議の委員は、地域で様々な子育て活動をしているので、近江八幡市に適した公私の連携を検討していく必要がある。各委員の立場から近江八幡市での子育てに対してどのように支援していけるか等、忌憚の無い意見を頂きたい。

2. 議事

(1) 報告事項

①振り返り第二期計画の振り返り

事務局：資料1について説明

（質疑無し）

②第三期計画策定に係るアンケート調査について

事務局：資料2について説明。

委 員：資料2のアンケートの回収状況について、近江兄弟社中学の有効回答数が表記されていない。どういうことか。

事務局：調査件数については、学校経由で配布した数が記載されている。有効回答数については、校区ごとに集計しており、近江兄弟社中学には校区の定めがないので、0件になってい

る。アンケート内で住まいの地域の回答欄があり、その回答を基に地域ごとに有効回答数を反映させている。

会 長：子育てに関する悩みを誰に相談するかという問いに対して、「近所の人」が前回調査よりも減少している。近所づきあいが自然発生することが難しいという証左だと思う。当事者交流を意図的に仕掛けていかなければならないだろう。

副会長：居場所としての放課後児童クラブの必要性が高まっていると感じた。

(2) 協議事項

①第三期計画策定スケジュールについて

事務局：資料3について説明

(質疑無し)

②第三期計画の基本理念について

事務局：資料4について説明。

事務局：第三期計画の方針を検討するに当たり、資料4を参考に基本理念について各委員から意見を頂戴したい。

委 員：地域との繋がりを重視してはどうか。近年、PTAや保護者が解散するなどし、親どうしの繋がりが希薄化している。子どもだけでなく、親世代の繋がりが重要でないか。子どもと一緒に親も成長するというメッセージが良いのではないか。

委 員：PTAについて、子どものためと親のための両立が望ましい。

また、小学校で通級指導教室を利用するかについて、入学前の10月頃に決めるよう求められる。学校としては、人員配置等で難しい面もあると思うが、保護者としてはいちど試してみたい気持ちもあるので、柔軟な対応をしてほしい。

委 員：PTAの活動については、入ってみないと分からないことが多い。PTA活動をしている中で、子どもと親のために活動することが大事と感じた。

委 員：こども基本法の理念にある「家庭や子育てに夢を持ち、子育てに伴う喜びを実感できる社会環境を整備すること」の社会の実現ができていないと感じる。毎日が子育てと仕事に追われているので、子育てと仕事で時間がない。もっと余裕をもって楽しく子育てができる社会が望ましい。

教師の仕事がたいへんであり、退職者が増えていると聞く。処遇の改善が必要だと思う。

委 員：地域をつくるのは市民ひとり一人の問題であるが、多くの市民は、このような場で子育て政策が議論されていることを知らないと思う。次期計画の策定に当たっては、本来は市民が地域を作っていくということを基に市民参画を進めてほしい。

委 員：親が笑顔であると子どもが笑顔になる。福祉は人が基本だ。子育て中に理解がある人に出会い、支え合えることで親の自己肯定感が高まる。共感をもって支えあえる人とたくさん出会える地域をめざすべき。

委 員：小学生への本の読み聞かせボランティアを始めて、感動する本に出会うことができた。子どもと関わる中で、改めて本にふれる喜びを実感できた。

また、まちづくり協議会で講座を子育て世代を対象に企画したところ、全世代が関心をもって参加してくれた。スポーツについても欧米の仕組を参考に全世代が参加できる催しを検討

している。こうした取組を通して、子育て世代だけでなく、地域全体の繋がりを大事にしたい。

委員：子育て世代は働き盛りで、何かと多忙なので、子育て世代を支援できる仕組みが必要。地域の先輩方が積み上げてきたノウハウを活用しサポートできないか。就学前の子どもや小学生に対して、どのような応援ができるか議論していきたい。

委員：多様性を大切にしたい。「上へ上へ」という周囲の雰囲気につらさを感じている人が増えている。ゆっくりと育てる、自分で考えて自分で決める、こういった多様性に応えられる場所が必要だと思う。早熟と晩成のどちらも認められるべき。

委員：子どもは、お客ではなく社会の一員であると扱うべき。子どもの意見を表明する力が大事になる。その際、意見を伝えられる側の聞く努力も重要。また、学校以外でもそれらの力が育てられるよう経験の場づくりが求められている。子どもが挫けないために回りの大人が見守らなければならないが、これを保護者だけで行うのはむずかしい。まずは、社会で育てるという考えを大事にしたい。

委員：先日、幼稚園で左義長まつりの様子を見学したところ、まつりに取り組む大人たちの姿に刺激されて、子どもたちの活動が活性化した。子どもはわくわくするとことに対して、前向きに行動を起こししやすい。アンケートの結果では、子どもが疲れを感じているような項目が見られたので、皆が前向きに進みやすくなるようなよう、前向きで明るいビジョンが望ましいと思う。

委員：子育て中の母親から「たまにはひとりでショッピングがしたい」と思い、実際にしたところ、「思ったよりも楽しくなかった」「ひとりではなくみんなでしたいと思った」という話を聞いた。子育て中は、自分の思い通りにならないことも多いが、体験を通じて自分の気持ちを確認するように伝えている。しかし、こういった話をする相手も時間もない方が多い。

また、子どもの成長を急がせるのではなく、ゆっくりと成長を見守ることが大事。

こども政策について、自分たちのことなのに、子どもがいない場所で議論している。子どもの意見を聞くことが必要。

委員：理念について、夢のあるキラキラ輝くイメージを伝えることも大事だが、一方で子育てに難しさや苦しさを抱えているような人に対して、「みんなが応援している」「大丈夫」という温かいメッセージも必要だと思う。

副会長：こどもまんなかと言いながら、実社会では理不尽なことが多い。子どもや保護者と関わる中で、大人の都合で子どもの生活が決まっていることが多いと感じる。理不尽が無くなるような社会にしたい。近江八幡市の子育ての方針について、誰もが共通して認識できることが大事だ。

委員：こども1人を育てるのには大人100人の力が必要ともいわれる。実際に子育てをする中で、子育てには学びが必要であると実感した。社会で子育てをするためには、新しい仕組みを考えていく必要がある。例えば、終業後に保育園に子どもを迎えに行き、その後家に帰って夕食の準備をするのが大変なので、保育園で夕食がとれると嬉しい。夕食は地域の方に協力いただくなどすれば、地域や他の保護者との交流にもつながるだろう。社会が変化する中で、仕組みも変えていく必要がある。今後は、経済的にも持続可能な仕組みを構想していくべき。

委員：この会議には、子育て中の方や子育て支援に関わる方が参加している。次期計画の策定に当たり、多様な意見を聞く必要はあるが、子育ての多忙さが指摘される中なので、開催回数や形式などについては、留意してほしい。

3. 閉会

副会長：近江八幡市が住みやすい町になってほしい。小学生の時に、親や地域の多くの方に支援してもらえた経験があり、近江八幡市は好きな町である。今後も計画を通じて、地域の人が支え合うことができるようになると良いと感じた。